

フリーターとニート

理事 飯野 公一

フリーターとかニートとか云う言葉が使われて久しい。働かなければ忽ち生活苦、とりわけ飢餓が襲ってくる時代に育った私共にとっては“何とも羨ましい表現だ”との皮肉の一つも言いたくなる。

古今東西、特殊階級である王侯貴族の子女にはごく例外的にこの様な現象があったかも知れない。しかしその様な階級にあっても殆どは武道の鍛錬、学問・芸術の修行等を強いられ、ぬくぬくと遊んだり、自分勝手な生き方を享受したケースは稀であった筈である。

フリーターとニートに関しては立派な著書まであり、いろいろと難しい解釈がある様であるが、要は“甘やかせ”から来た“甘えの構造”であると私には思えてならない。

○ 先ずフリーターであるが、本人の“心のあり方”からすれば、拘束を嫌い、一定の規律を嫌う所から発しているのだと思われる。能力と時間の切り売りはよいが、所属意識などは持ちたくない、と云う気持なのであろう。

農業のウエイトが高かった日本では、水を引くのも畝を築くのも協同作業によるが多かった。協力し合って良い仕事をなし遂げようと云うのは永く日本民族に定着していた“エトス”であった。この様な日本人の“エトス”が時代と共に漸次変貌を遂げるのはやむをえない所であろうが、フリーターに関して言えば、エトスの変化と云うより“甘えの構造”がその底辺にある様に思えてならない。

もう一つ、フリーター現象を招来した原因の一つとして労働組合の権利伸長があると私は思っている。敗戦後日本の組合は、所属員の権利伸長、義務放棄に力をふるって来た。先ほど被雇用者側の“心のあり方”がフリーター現象を生み出すと述べたが、組合の問題は雇用者の側からフリーターを生み出す条件の一つである。さぼったり、寝ころんだりしている従業員を解雇一つ出来ないのであれば、正式従業員として雇用することは避けたい。アルバイト、パートならばその点弾力性が

余程高い。これ等の事情が雇用者側から見たフリーター発生の条件となる。

○ 次にニートとなると、頭の古い私には全く付き合い切れなくなる。

人間15～20才ぐらいまでは親に養って貰うのが自然の営みであろう。この時期を過ぎたら精神的にも経済的にも独り立ちし、社会への貢献を通じて正当な報酬を得、子を育て、或いは親に恩返しする、と云うのが、ごくごく普通の姿ではあるまいか。

良い年をして学校へも行かず、職にもつかず、昔風に言えば“どうやって食べているのか”不思議でならない。それが飢えることもなく生きていられるのは“親”と云うスポンサーがそれを許しているからであろう。この場合、親の行為は“良識”と云うものから大きく外れている。もしくは心のネジが緩んでいる、と思わざるを得ない。

“はい、お坊ちゃま、お嬢ちゃま、この勉強は如何でございますか、この仕事は如何でございますようか、お気に召さなければ別のコースも用意してございますよ”などと我儘ものの機嫌を取らねばならない必然性は全くない。

えらい学者さんや評論家の分析を聞いていると“社会が悪い、学校が悪い、国家が悪い”と何でもよそに責任を転嫁している様に聞こえる。本当にそうなのであろうか。最大の責任者たるスポンサー（親）及び本人に反省すべき点はないのであろうか。

○ 私は素朴な良識、常識が人間社会を律して行くの一番良い尺度であると思っている。科学が進歩しようと、グルンドにあるものは“良識”と“素朴な倫理観”でなければいけないと信じている。

“お天道さまに申訳ない”“勿体なくて目がつぶれる”“独立自尊”と云ったエモーションが、精神的な人間環境を善導してくれる“エトス”であると考えている。

(元三菱銀行専務・(株)DCカード社長)